

あゆみ

J C H O
二本松病院

二本松市成田町1-553

TEL.0243-23-1231

FAX.0243-23-5086

<http://nihonmatsu.jcho.go.jp>

発行者：あゆみ編集委員会

「地域包括ケアシステム」について

最近、新聞、テレビ等でよく耳にする「地域包括ケアシステム」という言葉をご存じでしょうか。全国では、現在、65歳以上の高齢人口が、国民の約4人に1人の割合となり、およそ3,000万人いると言われています。このため国(厚生労働省)では、西暦2025年(平成37年)を目途に高齢者の尊厳の保持と自立支援の目的の下で、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるように計画を策定して、医療・介護・予防・住まい・生活支援を一体的に提供するため地域の包括的な支援・サービス提供体制の構築を推進していくこととしています。この支援・サービス提供体制が「地域包括ケアシステム」なのです。

皆さんは、医療分野の2025年問題を知っていますか。戦後のベビーブームに誕生した団塊の世代が後期高齢者(75歳以上)になる西暦2025年(平成37年)に向けて、各地でどんどん高齢化率の上昇が進み、年間死亡者数が120万人に上ることが予想され、この「多死社会」を迎えた時に必要な医療や介護などを受けられない「医療難民」をどうするかという問題があります。

現在、国では、終末期医療の在り方や将来の医療・介護提供体制の見直しの議論を始めています。特に終末期の医療をめぐるっては、患者本人や家族が多くの悩みを抱え、逆にそれが医療現場での対応を難しくしている場合もあります。

これらの課題を解決するために、国は、支援相談員の養成や、専門的な医療・在宅療養に向けて適切

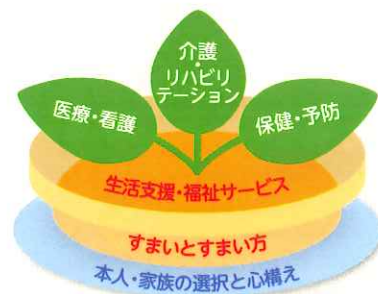
な助言等が出来る人材を育成し、生活面を支えようと様々な施策を講じて予算を計上しています。実際は各市町村や都道府県などが、それぞれの地域の自主性に基づき、地域の特性に応じて体制を作り上げ実行していくことが重要とされていますので、今後の各自治体の取り組みに期待するところです。

一方、JCHOグループ病院では、全国57病院のすべてに「地域包括ケア推進室」を立ち上げて活動を始めました。当JCHO 二本松病院も、これらの“連携ギャップ”を埋めるために、地域医療・地域包括ケアに積極的に取り組んでいくことを目的として「地域連携室」を7月にリニューアルし、人員体制を強化しました。

入院中の患者様は勿論、退院後も在宅での治療を継続し、安心して生活できるように相談や関係機関との調整作業を進めております。今後はさらに、当院の診療機能を活かした医療から附属老健、附属訪問看護ステーションの機能を発揮しつつ連携し、地域の皆様と一緒に取り組んでいきます。より良い病院づくりのために努力は惜しみませんので、どうぞよろしく願いいたします。

総看護師長

佐藤 妙子





がん患者支援チャリティーイベント

「リレー・フォー・ライフ・ジャパン2015福島」

～「がんは24時間眠らない」「がん患者は24時間戦っている」～

RFL(リレー・フォー・ライフ)をご存知ですか?

RFLはアメリカ対がん協会(ACS)が国際ライセンスを持っている企画で、日本では公益財団法人日本対がん協会にライセンスが与えられています。がん患者さんやそのご家族を支援し、地域全体でがんと向き合い、がん征圧をめざすチャリティー活動です。命を救うこと(Save Lives)を使命とし、がんの告知を乗り越え、生きていることを祝福し(Celebrate)、旅立った愛する人たちを偲び(Remember)、がんに負けない(Fight Back)社会を作ることをめざします。

今年も8月22日と23日の二日間にわたり、福島市のあづま総合体育館で「リレー・フォー・ライフ・ジャパン」が開催されました。職員の皆様には多くのご寄附とイベントへの参加等ご協力をいただきありがとうございます。お陰様で、院内では23,868円の募金と7万円分のグッズ購入をいただき、そしてイベントでは総額4,363,098円の募金が集まりました。心より感謝申し上げます。

RFLは福島医大器官制御外科学主任教授の竹之下誠一大会会長の開会宣言後、サバイバズラップに引き続き41の参加団体の紹介とともにリレーウォークが始まりました。当院では今年新たに作っていただいた「JCHO二本松病院」の横断幕とフラックを掲げ、たすきを繋ぎました。

会場では、トラックに見立てた楕円形の円の周りを自分たちのペースで交代しながら歩き、その周りには各団体が、手づくりの小物の販売やマッサージブース、がんについての相談や喫茶コーナーなどの出店がありました。またバンドによる生演奏やダンスチームの出演、パネルディスカッションや幼稚園児のマーチング等、さらに会場の外でもコーヒーショップやカレー・お惣菜、パン屋の出店等々、盛りだくさんの協賛があり、見て聴いて体を使って楽しみ、お腹も満たされました。ルミナリエセレモニーでは、暗い体育館に灯された一人ひとりの思いの詰まったメッセージ「お

疲れ様、ゆっくり休んでね」「○○ちゃん頑張ったね」等から感動をいただき、そして夜通し繋いだナイトウォークではまさに「がんは24時間眠らない」時間が静かに過ぎていきました。

参加しての感想は、がんと闘う方々を応援している皆さんの努力にも感銘を受けますが、何より現在戦っているがん患者さんやがん経験者(サバイバー)やその家族や遺族(ケアギバー)が率先してこのイベントに出向き、今年も参加できたことへの感謝と喜びを分かち合っている姿に、そして自らの足や車いすでリレーウォークに笑顔で参加している姿に心打たれました。そんな姿が人々の心を動かし、年々開催地も増え参加者も増えてきているのだと思います。今年ケアギバーとなった私自身、父への思いをはせながら心も体も充実した二日間を過ごすことができました。

このイベントへは多くの企業が協賛しており参加団体の収益はすべて寄付され、運営もすべてボランティアによるものです。一人ひとりの思いに心より感謝し、来年も再来年もこのイベントが成功することを祈りつつ、皆様の参加も是非お待ちしております。

看護課 外来

鈴木 ゆみ



当院で甲状腺検査ができます!

このたび 県民健康調査(甲状腺検査の一次検査)を行うこととなりました。

東日本大震災により、福島第一原発事故がおこり、それに伴い放射性物質が県内に飛散しました。その中に含まれる放射性ヨウ素は成人に比べ成長期の小児の甲状腺に取り込まれ易いことがわかっています。この健診は成長期の小児の甲状腺への影響を把握し、早期に病気を発見するために行われています。

検査の対象者は、原発事故の発生当時18歳までの方々で、健診は20歳までが2年に1度、それ以降は5年に一度行われます。現在は2回目の健診が行われています。

担当の医師は、県立福島医大出身の中野恵一先生で、内分泌・甲状腺外科専門医、日本甲状腺学会専門医などの資格をお持ちで甲状腺検査にも精通した先生です。

健診行う医療機関は、2つの条件が必要となっています。

1つ目は、検査を行う検査者です。

検査を行う技師は、福島県独自の資格が必要です。3回の講習会、2回の実技実習を受講して試験

を受け、試験合格後、3回の健診、実技実習等に参加して資格を取得することとなります。

2つ目は、検査をする機器(エコー装置)です。小児の甲状腺を検査するという点で成人よりも細かく映る精密な機器を使用し検査を行わなければなりません。

当院では、6月に県の審査を受けて承認をいただき、この度、健診を行うこととなりました。

今後は、中野先生の指導の下、地域医療への貢献を心がけながら検査を行いたいと思います。

主任臨床検査技師 相川 功



リラックスして
くださいね。
順調ですよ!

高精度な超音波診断
装置で検査します!



訪問看護 ステーションより お知らせです!

キビキビとした走りと
スムーズなハンドリング!
そして何より**超低燃費!!**

これで毎日の訪問もラクラクです!

新車お披露目!!



敬老会を行いました!

さる9月17日(木)に、平成27年度の敬老会を盛大に行いました。今年度の賀寿の方々は、最高齢104歳を筆頭に70歳までの入所者や通所者、計36名の方々が対象となりました。式は、六角施設長のお祝いのあいさつで始まり、賀寿の皆さんへの記念品贈呈は、代表として今年90歳の佐藤ヒロ子さんに受け取っていただき、あわせて9月の誕生者にも花束を贈呈しました。引き続き、遠藤副施設長の発声で乾杯を行い、みんなで賀寿の方々をお祝いしました。余興では、郡山市に避難されている富岡町の方々の富岡民謡愛好会



様による東北6県の民謡や相馬流れなど計7曲を披露していただき、集まった方々は懐かしそうに口ずさんでいました。また、職員有志によるグループ「R&R」による歌の披露など楽しい時間を過ごしていただきました。

附属老健ボランティア委員会 安田 忠浩



編集
後記

長雨が続いた今月は、台風18号による大雨で土砂災害や河川の氾濫が発生し、各地に大きな爪痕を残しました。被害に遭われた方々に心よりお見舞い申し上げます。さて、秋は芋煮の季節ですね。調理器具の貸し出しや食材が準備されている施設も多く、アウトドア初心者でも気軽に楽しめるようになりました。夏のバーベキューでは雨に降られてしまいましたが、次は、秋晴れの中ビールを美味しく飲みたいものです。

H・M記